

二〇二四年一月一日

スプーンで掬ひて啜る熟し柿
御朱印の達筆凜と秋日和
玉眼に見透かされる秋思かな
怒髪天なる風神に冬近し
深秋やこれより脱帽御廟橋

二〇二四年一月三十一日

輪橋を鏡写しに水澄める
虫干しやホ句散りばめし畳紙
地団駄のごと落葉踏む石畳
廃屋の増えし過疎地や柿花火
昨夜の雨嘘のごとくに今朝の秋

二〇二四年一月三〇日

くわりんの実疵より放つ香気かな
をさなめく白寿の笑みや栗善哉
藤袴ここにあるぞと蝶憩ふ
濯ぎ物干す背に和む小春かな
あり余る量と知りつつ種を採る
キャディーらの指呼せる秀枝帰り花
千年の杉木立縫ふ爽気かな

二〇二四年一月二十九日

赤まんま真中に立ちし道祖神
時雨るるや茶屋にて借りる男傘
窓小春ベビー誕生待つベット
虫に傷み熱暑に傷み柿落葉

ほたる

山椒

もとこ

たか子

やよい

やよい

ほたる

明日香

愛正

康子

むべ

あひる

よし女

みきえ

うつぎ

えいじ

やよい

明日香

むべ

康子

うつぎ

二〇二四年一月二十八日

山巖に霧立ち上る朝ぼらけ
お喋りとおでんで足りる今日の客

二〇二四年一月二十七日

湯上がりの晩酌二合秋合せ
木犀の匂ふ校舎が投票所
讃美歌を墓前に手向く秋の人

二〇二四年一月二十六日

石階に触れて零るる実むらさき
幼な子の内緒話や縁小春

明日香

うつぎ

ほたる

せいじ

むべ

むべ

むべ

みきお

みきお

毎日句会みのる選・二〇二四年一月三日